
SLASH3+
Ren-Ai Mangaka Presents
Fate/stay night Fan Book3+(Plus)
For Adult Only


SLASH3+



前記

初めまして or いつもありがとうございます。

SLASH3の後記で「藤ねえはしばらく無い」と言った舌の根も乾かぬ内の藤ねえ本です。

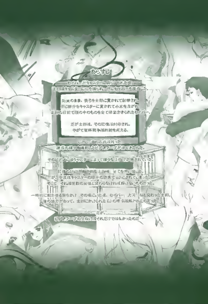
ちなみに、内容的には3の補間本となります。
3では２つのエピソードが載っていたのですが、その隙間埋めだったり。
いや、隙間を埋めないとあまりにも（色んな意味で）飛び過ぎだったので。

それにしても、藤ねえは可愛いなぁ。
今回藤ねえ以外の出演者は、藤ねえに萌える自分と同じ立場に立っています。
作者も登場キャラも皆で萌える、アイドルな藤ねえ総受け（？）本。
とはいえ、まあいつものノリですが。

今回、文章部分がかなり多めです。
色々と危険ですので、
属性が無い場合は飛ばしてください…
まあ、愛情はたっぷりと篭ってますが。

それでは、また後ほど。





あらすじ
セイバーがキャスターに拉致された夜。
士郎はキャスターに心を操られ、共にセイバーを陵辱した。
処女のまま、後ろを士郎に貫かれて射精され、
同じ部分をキャスターに貫かれて小水を注がれ、
士郎の目前で腹の中のものを全て排出させられたセイバー。
だが士郎は、その記憶は封印され、
やがて聖杯戦争は終結を迎える。
しかし、その爪痕は残った
陵辱の様子を撮影したビデオテープが出てきたのだ。
そのビデオにはキャスターによって様々な仕掛けが施されていた。
記憶の封印が解かれた士郎は、全てを思い出した。
が、今度はキャスターの暗示の効果で虜にされてしまった。
そして、それは複数の女性と交わらなければ解けないものだった。
一時的に紛らせる術なかり… その場にいた凛、セイバー、大河、桜と交わった士郎。
皆の協力があって、士郎にかけられた虜の暗示は解かれたのだった。
だが。
ビデオテープの仕掛けはそれだけではなかったのだ……


まあ詰まりは セックスに対する 抵抗感が無くなって
士郎とだったら どんな事も出来るって 暗示が掛かった訳なのよ
まあ私は元々 士郎の事好きだし 別に構わないわ
そ それは嬉しいけど
他の皆が どうなのか
現状では どうにも出来ない
悔しいけど— キャスターは 今の時代なら
魔法使いクラスの 魔力の持ち主 だったから


セイバーは
魔術に対してはかなりの耐性があるんだろう？
そうです だから私の行動は全て己の誓いに従ったまで
だからこの状況はセイバーにとっては逆にいい訳なのよ
いいって セイバーはこういう乱れた状況は嫌じゃないのか
そりゃそうよ だって二人とも士郎の事好きだし
今後使う魔術のレパートリーも幅が広がって良い事尽くめじゃない
あと 桜に関してはまず私が改めて二人で話し合ってみるから
じゃあ問題は無ねえか


くっ…！
俺か
不甲斐ない
所為で…
シロウ…
私が
どうしたって？
ふ
藤ねぇ
んー
そりゃまた
厄介な事に
なったねぇ


本当にごめん～
取り返しのつかない事になって…
正直ね 不思議だったんだ
ある種の異常事態にどうしてこうも馴染んじゃってるのか
でもま 理由が分かってスッキリした
私も出来るだけ治せるように努力してみます
ありがとうね 凛ちゃん
で 士郎にお願い
ビデオでセイバーちゃんがされた事と
同じ事を私にしなさい

「な……なんでさ」

あまりにも唐突で突拍子もない言葉、思考回路が凍りついた。

「まあ色々と覚悟を決める為の儀式みたいなものよ」
「覚悟？ 儀式？」
「現状を受け止めて今後やっていく為のね」

……言わんとする事は分かる。
分かるが……

「それに、今のままじゃどうにも引け目を感じるし」
「引け目？」
「ほら、セイバーちゃんの恥ずかしい所、ビデオで見ちゃったでしょ」
「それはまあ」
「だからって……」
「だから、いい切っ掛けかなって」
「ただでさえアンタは私以上に保守的過ぎる部分があるからね」
「む……」
「大体、アンタだって、そのエッチな事なら何でも出来ちゃう痴示、解かってるんでしょ？」

そうなのだ。
きっと今の状態なら、指示された事に対して抵抗無く出来てしまうだろう。
だから困っているのだ。

「でも……士郎がね、そうやって女の子を大事にするのは私も嬉しいの」
「……だったら」
「それでも、今はそれが正解じゃない」
「……」
「貴方のそういう部分を崩すには、過激すぎるくらいで丁度いいのよ」
「それにしたって」
「ああもう、とにかく黙って言う事を聞けばいいの！」

……キレられた。

どうしたものか、[illegible]

[illegible]

……結局押し切られるのか……

[illegible]

まあ仕方ない。

[illegible]

よし、と何か頼みたそうに聞き、今度はセイバーに向いかける。

「ね、初めて士郎と繋がった時……どんな感じだった？」
「……やはり経験の無い大きさの物が入ってくるのですから、苦しかった」
「そりゃそうよね……」
「でも……前と後ろ、体と心とは正反対でした」
「どういう事？」
どういう事だろう。
俺もそうだが、遠坂も桜も耳をダンボにして聞いている。
「体の反応としては、正道より後ろの方が楽でした」
「まあ、元々物の出入りはあるからある程度慣れてるわね」
頷くセイバー。
「ですが、前はそうではない……それこそ言葉通り初めて何かが通ったのだから」
「そうよね、お尻の穴と違って、早々何かを通せない場所だもの」
再び大きく頷くセイバー。
「だが逆に、心は……前を捧げた時の方が遥かに楽で……喜びに満ちていました」
「それは……前で繋がる方が普通の事だから？」
「それもありますが……それよりはやはり士郎への気持ちの違いが大きいでしょう」
感情の違い……か。
どちらも強制的な不可避の状況に追い込まれての事ではあったが、そこにどういう違いがあったのか？
「単純な事ですよ大河、シロウ」
「むむ……その心は？」
「愛です」
「……なるほど、シンプルでズバリそのものね」
……痺れる。

「最初は契約上の関係でしかなかった……もちろんシロウは好ましい人格でしたし、命をかけて守る存在でしたが」
「ほう」
「初めて繋がって、ようやくそこで男と女の関係が始まったのでしょう……今思えば」
遡れる過去、
自分も、記憶が蘇るまではあくまでもサーヴァントとしてセイバーを見ていた。
セイバーの事は好きだが、あくまでも恋愛感情抜きの事だった。
「例え繋がるのが前後逆でも、同じ事を誓ったはずです」
「なるほどねぇ……」
ウンウンと頷く藤ねえ。
「私はセイバーちゃんと前後逆になるわけだけど……気持ちは同じかもね」
「そうですね」
にっこりと微笑みあう二人。
俺の介入出来ない世界のようだ。
そして、練習場に移動する事にした。
いよいよ、『儀式』を執り行うのだ。
「それじゃ士郎……まず私のお尻……柔らかく解して」
「わ、分かった」
真っ赤になりながらスカートをたくし上げる藤ねえ。
……何だかこういう時の藤ねえは矢鱈と可愛くてドキドキしてしまう。
しかも驚いた事に、いつの間にかパンツを脱いでいる!!
「そ、そういや遠坂と桜はどうするんだ？」
と、照れ隠しに話を振ってみる。
互いに向き合い、目が合うと真っ赤になって俯く二人。
これまたとても可愛くてドキドキする。

そういうもんか・・？
でも何か、
今の話っぽに引っ掛かる。

「だからほら、こうしてお浣腸の道具もちゃんと持って来ました
し！」

ちょっと待て。
「持って来たって何だよ、桜」
「え？　ああ、実は私、普段からお通じが止まりがちで、割と
慣れてるんですよ」
あー・・いや、そうじゃなくて。
「桜のその言い方だと、今この時の為に予め準備して持って
来たって事になるんじゃないか？」
「あ・・」

・・みんな揃いも揃って「しまった、バレちゃった」と言うような
リアクションをする。
もしかして・・

全部　出　来　レ　ー　ス　だったのか！

「な、何よ何よ！　全部士郎が悪いんじゃない！」
「そうそう、これ位の事をしなくちゃアンタ頭っからに
『駄目！』とか言うでしょ」

うわ、逆切れされた。
・・確かに遠坂の言い分も当たってはいるが。

「怒らないで下さいシロウ、みんな貴方の為に考えたこと
なんです」
「・・それはまあ、分かるけどさ・・」
・・・・うん、そうだな。
「大丈夫、俺もちゃんと覚悟決めたから」
素直に謝ってやる。

「お、分かればいいのよ・・」
遠坂もそれで納得したようだ。

ふと横を見ると、セイバーが桜を、凛が遠坂を押してる。

・・皆それぞれ準備してるようだ。

「次は・・お腹の中を綺麗にしましょう」

桜の言葉にハッとする。

「えっと・・じゃあお手本を・・」
慣れた手つきで道具を準備する桜。
普通よりも大きめの注射器にホースを付け、お尻に挿して
注入する。
「んん・・ん・・ふう・・こんな感じです」

ホースを抜いて再び液を満たした注射器を、手渡された。
桜が上手く動かないまま、それでも慎重に言われた様に挿し入れる。

「は・入ってくる・・う・・ああ・・」
ゆっくりと、ゆっくりと、注ぎ入れる。
・・全部入った。

「ああ・・も・・漏れる・・」
「だ、大丈夫か藤ねえ」
「急・・して・・」
　焦って言われても。
慌てて、とりあえず、あいた左手の人差し指を差し込む。
「え、違う！　本物のゴム栓があるって」
「え、マジか」
「ああん、駄目、指抜いちゃ・・漏れるってー！」
ほら、ほら、つ・・！

「先輩、そのままトイレに！　遠坂先輩には私が付いておきます！」
「任せた！」
「私が大河に肩を貸します！」
「よろしく！」

藤ねえと慎重にトイレに向かう。
「うう……このお酒初心者用って言ってたけど……効き目強すぎるよ……」
「頑張れ藤ねえ、すぐそこだ！」
「うん……ん……到着……」
少しずつ体勢を入れ替え、便座に向かう。
ゆっくりと腰を沈めて……
「ほうっ……」
力が突然抜けたのか、一気に座り込んでしまい、
「おわっ！」
いたたたっ！　腰捻った！
と、腰がスポンと抜け、
「あああああああああああああ……！」
……
……。
目の当たりにしてしまった。
「うう……うわあああぁぁん……」
泣き出してしまった藤ねえ。
「大丈夫、大丈夫ですから大河……」
セイバーが慌ててあやしに掛かる。
「うう……士郎に……見られちゃった——嫌われちゃうよぉ……」
ちょ、ちょっと待て藤ねえ！
「そんな事位い！　嫌ったりしない！」
ピタ。
「ホントに……？」
「もちろん！」
「じゃあ、好き？」
「あ……ああ好きだ」
「愛してる？」
「う……うん……」
「士郎——！　大好き！」
まあ、これはこれで良し、なのかな。
見ればセイバーも笑顔になっている。
一件落着？

「し、士郎……黙ってないでそこ退きなさい！」
あ……悪い……
後ろには桜もお腹を押さえながら待っている。
まあ苦笑を浮かべてる辺り、まだ余裕がありそうだ。
「それじゃ先輩……しますね……」
うううう……こんなの予定になかったのに……」
その瞬間、藤ねえだけだと可哀想という事で、桜と遠坂も目の前でする事になった……。
何と言うか、もうここまでくると、何に対してもドンと来い！ってな気になる。
……キャスターがいたら、この状況を何と評しただろうか。
まあ兎も角、藤ねえの提案は、予想を100倍以上超える羞恥となったのだった。
……いいのか？
風呂に入ってから、「後始末をしますから、先輩は水分をたっぷりと取って来て下さい」と桜に追い出され、台所で一人寂しくスポーツドリンクを飲む俺だった。


シロウ
うん
準備が出来ましたよ
うわっ

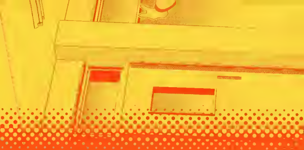

それじゃ早速 先生から
もう すぐに 入れられるよ
後ろの初めても 士郎にあげるね
ありがとうな 藤ねえ・・
あっ・・ん 入っ・・て きたっ・・
何だか 嬉しいな・・
それじゃ・・ おしっこ出して
ふふ♥
・ん・ くうっ
あーっ
お腹の中 はいってくるー
全部 藤ねえの中に 出したよ
うん
士郎の気持ちも 一緒に注がれた 気がする


それでは
あっ
遠坂先輩の
おしっこが
桜に
凜のを
そして
凜に桜のを
入れますね
桜の
が
私の
お腹の中に
入って来る
それじゃ
見ててね
セイバー
ちゃん
んっ
ピクッ




こういうのって
恥ずかしいけど
嬉しくって
楽しいね！
私も！





SLASH3+



SLASH3+

Ren-Ai Mangaka Presents
Fate/stay night Fan Book3+(Plus)
For Adult Only